原著論文

大衆化する心理学における「セルフコントロール」の登場

――ジョセフ・ジャストロウを中心に――

篠　木　　涼

（立命館大学衣笠総合研究機構）

本論は，自己コントロールあるいはセルフコントロールと呼ばれる諸概念を研究する領域横断的な動向の高まりを背景としている。研究目的は，大衆心理学の文脈において自己コントロールないしセルフコントロールの概念がどのようなかたちで登場してきたのかを，19 世紀末から 20 世紀半ばにかけて主として大衆向けの啓発的活動を行った心理学者ジョセフ・ジャストロウを中心に明らかにすることである。結果，セルフコントロールという主題はジャストロウの活動のなかで，徐々に現れているが，明確に論じられたのは 1915 年の『性格と気質』においてであったこと。そしてジャストロウのセルフコントロール論は，ウィリアム・マクドゥーガルの『社会心理学入門』の影響の上に形成されていることを示した。

キーワード：ジョセフ・ジャストロウ，セルフコントロール，自己コントロール，
ウィリアム・マクドゥーガル，心理学の大衆化

立命館人間科学研究，No.32，35–53，2015.

本論は，心理学の大衆化の文脈において自己コントロールないしセルフコントロールの概念がどのようなかたちで登場してきたのかを，19 世紀末から 20 世紀半ばにかけて大衆向けの啓発を行った心理学者ジョセフ・ジャストロウ Joseph Jastrow［1863-1944］の言説を中心に明らかにすることを目的とする。

ジョセフ・ジャストロウは，19 世紀後半のアメリカで心理学の研究を開始し，その後 20 世紀前半多様なメディアを通じて心理学の大衆化を行った心理学者である。ウィスコンシン大学マディソン校の心理学教授を務め，アメリカ心理学会 APA の代表として 1893 年のシカゴ万国博覧会 Chicago World's Fair では心理学の展示 Psychology Pavilion の組織運営を行った。1900 年には APA 会長を務めている（Blumenthal 1994）。1900 年に発表した『心理学の事実と寓話』（Jastrow 1900）は，大衆向けの心理学的著作として多く読まれた。たとえば，ルードヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン Ludwig Wittgenstein［1889-1951］が『哲学探究』において分析したアヒルとウサギの両方に見える多義図形は，この本を参照したものである（Wittgenstein 2003）。

ジャストロウは，マスメディアをにぎわす心理学者の最初期の，そして代表的な一人であった。新聞や雑誌，ラジオといったメディアにおいて様々な活動を行い，またその活動は『ニューヨーク・タイムズ』などによって大衆に伝達され続けた。たとえば，ジャストロウは，心霊主義批判を旺盛に行い続けた。アーサー・コナン・ドイル Arthur Conan Doyle［1859-1939］によるその擁護に対して批判を行い，他方でドイル

がジャストロウに対して行った批判の模様が伝えられるなどしている（Jastrow 1923; New York Times 1926）。

ジャストロウによる大衆向けの心理学的言説の中心の一つは，心霊主義批判であったが，もう一つ，日常生活に向けた心理学的なアドバイス，カウンセリングや人生相談を行っている。これらにかかわる中心的な主題の一つが，情動などの自己の様々な心的状態に対するコントロールであった（Jastrow 1929）。心理学者という心の専門家が，マスメディアに登場し，自己をどう御すればいいのかを説く，そのような風景が20世紀前半に姿を現した。ジャストロウはそのようななかでもっとも際立っていた一人だったようである。では，ジャストロウにとって，自己に関わるコントロール，セルフコントロールと呼ばれる概念は，どのようなものであったのか，それが問題である。

I

1　セルフコントロール論

本論が，このように，ジャストロウへ焦点を合わせることになったのには，次のような研究史上の背景がある。20世紀後半以降展開してきたセルフコントロールをめぐる心理学の研究動向と，19世紀末以降20世紀全体を通じて進展した心理学の大衆化の歴史をめぐる研究動向である。

セルフコントロールは，とりわけ20世紀半ば以降焦点が当てられ，近年の心理学において関心を集めている研究領域となっている。近年ではセルフコントロールは，複数の関連する研究動向において様々に用いられ，それらを総称する概念として考えられている。たとえば，「セルフコントロールにつけられる名前は様々に異なっており，満足の延期 delay of gratification，エフォートフル・コントロール，意志力，エゴゼクティブ･コントロール，時間選好，自己訓練，自己統制，自我強度を含んで」（Duckworth 2011: 2639）おり，「セルフコントロールは，様々な学問領域からとられた概念と測定値を橋渡しする傘となる構成概念」（Moffitt et al 2011: 2693）となっている。また，現代の心理学や神経科学の成果に哲学的な観点を踏まえつつ総合的に，たばこやアルコール，ドラッグなどに対するアディクションと，セルフコントロールとされる現象がいかなるものであるのかを明らかにしようとする研究もまとめられている（Levy 2013）[1)]。

このような動向に至る20世紀の研究として，たとえば，徹底的行動主義のバラス・フレデリック・スキナー Burrhus Frederic Skinner［1904-1990］が，環境コントロールと並べセルフコントロールを主題とした検討を行っている（Skinner 1965=2008）。また，パーソナリティ心理学のウォルター・ミシェル Walter Mischel［1930-］はセルフコントロールを主題とした実験を行い，1960年代から1970年代にかけ行った「マシュマロ実験」などにおいて示した満足の延期に関する研究はよく知られている（Mischel 1968=1992; 1971; 2014）。

2　心理学の大衆化論

20世紀後半に展開してきた，心理学の展開自

1）たとえば，Gold（2013）は，セルフコントロール概念が，二つの異なる状況の反対語として用いられていることを指摘する。アリストテレスが提起したアクラシア論の伝統にある哲学的使用と，日常生活的な語の使用を区別するのである。一方の哲学的セルフコントロール概念とは，何らかの誘惑を感じ，その誘惑に乗らないほうがよいと判断しながら，しかしその誘惑に乗ってしまう状態であるアクラシアに対して，そのような誘惑をコントロールすることをセルフコントロールとする解釈である。他方の日常的なセルフコントロール概念とは，様々な状況において自身の行為を意図的にコントロールする能力を失っている状況に対して，そのような能力をセルフコントロールとする解釈である。このような区別のもとアディクションとの関係を検討するのである。

体を社会的文化的状況との相互作用から記述する動向として心理学の大衆化をめぐる歴史研究がある。19 世紀に登場した心理学が科学としての位置を大学において確立していくなかで行ってきた，大衆化の状況に焦点が合わせられるようになってきたのである。

心理学の大衆化は，近代における自然科学の大衆化の一部でもあったことを Burnham（1987）が描写している。神秘主義 mysticism や心霊研究 psychical research，「迷信」的なものに対する批判を中心として，19 世紀に盛んになった自然科学の大衆化が，20 世紀になりその担い手自体をマスメディアやジャーナリズムその他の非専門家に譲り渡した結果，次第にマスメディアやジャーナリズムが，科学の大衆化が批判してきた「迷信」的なものと同じ役割を果たすようになってきたというのである。そして，19 世紀後半に成立した新興の学問領域であった心理学に固有の状況として，そもそも心理学が講義と実験室を大学のなかにもち始め，専門の学科をもつまでに立場を確立する過程において，教育ある公衆を引き寄せ説得する大衆化の活動を行う必要があったことを指摘する。こうして心理学が大衆化する上で主題としたのが，自己と他者のコントロールであった。次のように述べている。

> 心理学という科学は，一方に，自分自身と他者へのコントロール（応用心理学）という大衆的関心，他方に，反神秘主義的な還元主義，ときに唯物論に向かう 19 世紀的な諸傾向の一つの極を背景として展開したのである。（Burnham 1987: 91）

心理学者たちが批判した神秘主義や心霊研究は，Morawski & Hornstein（1991）によれば，心理学が登場する以前に心の専門家とみなされ，すでに広く行われてきた活動に連なるものであり，心理学者たちは自身と彼らとの区別を明確にする必要があった。自己と他者のコントロールに関わる主題は，必ずしも，心理学が独自に開始したものではなく，同時代の大衆向けの著作や雑誌においてしばしば登場するものであったのである。そして 1920 年代初頭までは，大衆化の担い手である専門家としての心理学者と，非専門家との区別が明確であったという。ここで，Morawski & Hornstein（1991）は，心理学の大衆化という際，心理学者と大衆を，それぞれひとつの均質なものとしてみなすことのないよう注意を促している。心理学者が大衆向けとして発表したものも，同時代の心理学者の統一的見解を公表するようなものではけっしてなかったこと。それが向けられる大衆として想定されているものもまた，必ずしも素朴な一般大衆といったものでもなく，心理学者以外の科学者をも含むような教養ある人々一般を含むようなものだったことである。

このような研究室で生産される専門知と外部で消費される大衆知という区別が固定的ではないことを強調しながら，Ward（2002）は，心理学の大衆化をめぐる内外の推進と批判の動向を明らかにしている。20 世紀初頭から，心理学者たちもおよそ，心理学を外部に大衆化し応用へと広げることを支持する傾向と，大学内での科学としての位置を重視する傾向とに分かれていた。1920 年代までに，心理学は多くの読者聴衆を獲得したが，学問領域内での分裂は大きくなっていた。アメリカ心理学会から 19 世紀末の大衆化の初期の代表者であるエドワード・スクリプチャー Edward Scripture［1864-1945］を排除しようという動きさえ生じるに至っている。20 世紀前半の時期まで大衆化の代表となったのが，まず同時代の神秘主義をもっとも強力に批判した心理学者ジョセフ・ジャストロウ，大衆向け言説を最も多くの執筆したジャーナリストのアディントン・ブルース Addington Bruce［1874–1959］，応用心理学を多方面に展開した心理学

者ヒューゴー・ミュンスターバーグ Hugo Münsterberg［1863-1916］であった。

このような大衆化への支持と大学内での科学的研究重視との分裂に関して注意しておきたいのは，心理学の大衆化に熱心だったジャストロウやミュンスターバーグは，神秘主義や心霊研究を批判する際に自分たちを科学の側に置き，これらの非科学性を問題にしたが，彼ら自身のいう科学性自体も，同時代に，問い直されていたということである。彼らの心理学の科学性は，たとえば同時代のジョン・ブローダス・ワトソン John Broadus Watson［1878-1958］が提唱した行動主義心理学のような観点からは，その科学性を批判されていたのである。ワトソンは，その宣言的な論文「行動主義の見地から見た心理学」の冒頭で次のようにいう。

> 行動主義者が考える心理学とは，完全に客観的で実験に基づくような自然科学の一部門のことだ。その理論上の目的は，行動の予測とコントロールである。内観が方法にとって欠くことのできない部分を形成することはないし，データの科学的価値は，意識に関して解釈を与える用意があるかどうかには基づいていない。（Watson 1913: 158）

ワトソンは，方法としての内観とデータとしての意識を，「客観的」な科学としての行動主義から批判する。神秘主義や心霊研究を批判するジャストロウやミュンスターバーグと，彼ら古い世代の心理学者を批判するワトソンらのより新しい方法を重んじるより客観主義的な心理学者との間で，どのようなものに科学性を認めるかに違いがあるのである。後に見るように，ジャストロウは社会心理学者のウィリアム・マクドゥーガル William McDougall［1871-1938］からの影響を受けるが，マクドゥーガルは 20 世紀前半におけるワトソンと行動主義に対する代表的な批判者となる（Watson & McDougall 1928）。そしてジャストロウ自身は，自伝において述べるように，ワトソンと行動主義心理学の方向を評価しつつ，心理学の範囲を基本的な反応のパターンへと制限するのを批判する両義的な立場をとることになる（Jastrow 1961）。20 世紀初頭から，心理学の大衆化は，このような科学性をめぐるせめぎあいのなかで行われていた。

では，自己と他者のコントロールという 20 世紀初頭の心理学の大衆化において大きな主題へと戻ると，具体的にはそれはどのように展開したのだろうか。ここからは，大衆化を進めた心理学者の中心として先行研究のいずれにおいても参照されるジョセフ・ジャストロウの活動に焦点をあて，自己のコントロール，あるいはセルフコントロールという主題がどのようなものとして登場してきたのかを明らかにしていきたい。このことは，心理学史だけではなく，現代の社会の心理主義化状況をより広い視野におく上でも有益であると思われる。以降，第 2 章でジャストロウの心理学史的位置づけを示した上で，第 3 章において 19 世紀末からのジャストロウの言説の主題をコントロール概念の使用に着目しつつ整理する。そしてセルフコントロール概念に焦点をあて，第 4 章ではジャストロウの『性格と気質』を，第 5 章ではマクドゥーガルの『社会心理学入門』を検討する。

Ⅱ　ジャストロウの心理学史的位置づけ

ジャストロウは心理学史においてどのように位置づけられるのか。20 世紀半ばの心理学史記述で挙げられるのは，アメリカにおけるパーソナリティや性格をめぐる心理学的研究の初期の一人であったこと（Roback 1952: 387），実験的心理学がまだ新しかった時期に重要な実験的研究を行ったこと，心霊研究に対する批判など科学的心理学の大衆化を行ったこと（Boring 1957: 541-542）である。だが，これらのうち，パーソナリティ

心理学，性格心理学での位置づけは，特性論的なパーソナリティ心理学で知られるゴードン・オルポート Gordon Willard Allport［1897-1967］の1937年の『パーソナリティ――心理学的解釈』においてそうであるように（Allport 1937=1982: 55=79），「性格と気質についての先行研究」（Jastrow 1915b）がギリシア時代から20世紀初めの科学的心理学までの性格研究史を簡潔にまとめた資料として参照されるにとどまる（Burnham 1968: 78）。他方で，20世紀末以降21世紀初頭の記述においては，とりわけ大衆化の実践（Schultz & Schultz 2004: 311）とそこでの心霊研究や神秘主義への批判（Leahey 1994: 190, Pickren & Rutherford 2010: 81）に焦点を当てた言及がされるようになっている。

このようなアメリカ心理学史の焦点の変化を含め，ジャストロウを対象とする研究が進んだのには，20世紀末に書簡や草稿を含めた資料群が整理されたという背景が考えられる。Blumenthal（1991, 1994）が，ジャストロウが務めたウィスコンシン大学マディソン校にほとんど残っていなかったこれらの資料群がデューク大学に収蔵された経緯を含め，ジャストロウの活動と業績の軌跡を描き出したのである。

Blumenthal（1994）によれば，ドイツの著名なタルムード研究者を父とするジャストロウは，1863年，家族がアメリカに移住する前に短期で滞在したポーランドのワルシャワで生まれた。その後，アメリカ，ペンシルバニア大学で哲学を学び，「この国で最初に形式的に制度化された心理学の博士課程である，1880年代半ばにほんの数年だけ存在した，ジョンズ・ホプキンス大学におけるグランヴィル・スタンリー・ホール Granville Stanley Hall［1844-1924］の心理学大学院課程から，最初の博士号を受けた」（Blumenthal 1991: 78）。セルフコントロールと自己欺瞞 self-deception に関わる問題は，早くもこの博士論文において萌芽が見られるという。大学院時代には，チャールズ・サンダース・パース Charles Sanders Peirce［1939-1914］とともに精神物理学の論文を執筆している。ジャストロウの博士論文は大いに引用されたが，ドイツでの学位が重要視された当時にアメリカ心理学会においてアメリカでの学位が不利に働いたためか，1886年に学位を取得した後2年間の職探しをせざるをえなくなる[2)]。ようやくウィスコンシン大学マディソン校の実験心理学及び比較心理学教授となったのは1888年のことである。1893年には，シカゴ万博における心理学展示館の運営を行っている。しかし，その後金銭上のトラブル等から1927年までで同大学を退職し，翌年から没年までボストンで専門的な作家，批評家として活動するようになる。ジャストロウは，一方で神秘主義批判を一貫して継続しながら，他方で神秘主義や心霊研究への関心をもったウィリアム・ジェイムズ William James［1842-1910］に対しては敬意を示し続けた。

このようなジャストロウの活動のなかで，比較的初期の活動と晩年の活動について研究が行われている。

初期の精神物理学や実験心理学的研究と後の大衆向け言説を結びつけるものとして，Pettit（2007）がある。Pettit（2007）は，これらのジャストロウの言説において反復される民族・人種 race 概念に着目し，ジャストロウが，錯覚・欺瞞の概念を，同時代の人種や性差に関わる差別の枠組みに対応するかたちで形成したことを明らかにしている。

ジャストロウの1930年代から40年代の晩年にかけての活動をめぐる研究として，Behrens（2009a, 2009b）がある。Behrens（2009a）は，1930年代以降目立ってきたアメリカでのラジオ放送における心理学者，「ラジオ心理学者」の動向を広く明らかにし，その代表としてジャスト

2）Roback（1952）は，ジャストロウがユダヤ系であることが不利に働いたのではないかとしている。

ロウを位置づけている。Behrens（2009b）は，第二次世界大戦期，ユダヤ人であったジャストロウが，心理学的にアドルフ・ヒトラーの批判を行った著作の刊行を試みながら，その言説が内容的にも文体的にも時代遅れとなったことなどのために，出版の支持を得られなかった状況を明らかにしている。

これらの諸研究，特にBlumenthal（1991）において，博士論文におけるセルフコントロール的な主題の萌芽が触れられているものの，この主題が後の大衆向けの言説において具体的にどのように展開してきたのかは，やはりほとんど明らかになっていない。

Ⅲ

1　ジャストロウにおけるセルフコントロール——1880年代

それでは，ジャストロウの文献のなかから，セルフコントロールという主題の登場を明らかにするためにコントロールという語の使用に着目しつつ，彼の心理学における様々な主題がどのように登場してきたのかを検討していきたい。数十年にわたる長い時期を扱うため，便宜上，10年毎に区切りまとめていく。

1880年代，大学院に入り心理学者としての研究を始め，1888年にウィスコンシン大学マディソン校で働き始める時期である。ジャストロウは大学院在学中からいくつも文献を発表しており，早くも1883年には方向感覚についての短い記事（Jastrow 1883）を執筆しており，他には人口統計（Jastrow 1885a）や合成写真とフランシス・ゴルトンFrancis Galton［1822-1911］を参照する（Jastrow 1885b）論文を執筆している。しかし，本格的にジャストロウが広範な執筆活動を始めるのは大学院を修了する1886年からだと思われる。この年の文献から，後のジャストロウの主題になるものが明確に見て取れるようになる。

まず，心理学という科学自体の紹介と同時代の心理学界の状況整理というその後も一貫して継続する主題が現れてくる（Jastrow 1886a; 1887; 1889a）。ヴィルヘルム・ヴントWilhelm Wundt［1832-1920］の心理学実験室に言及し「観察の補助として実験を行うことが科学にとって重要であり，新しい器具の採用」を心理学は行っており，「心理学には，ノマド状態を脱する用意ができている」ことを主張する（Jastrow 1886a: 459）。同時代の心理学研究の中心主題であった様々な心的過程の時間測定について，ジェイムズ・マッキーン・キャッテルJames McKeen Cattell［1860-1944］の実験の例を挙げ，次のように述べている。

> 装置が働く際のいかなる変動からも影響を受けないようにするために，キャッテルは，これをコントロールするための手段を工夫した。その工夫の本質的な部分は，クロノスコープを稼働する際に最適な電流の強度を確定したことである。（Jastrow 1886a: 460）

ここでは，その後も一般的に見られるように，不要な影響を排除し，正確な実験のための調整を行うことに，コントロールの語が使われている。

すでにこの時期から，神秘主義批判の主題が明確に現れている。魔術などの神秘主義の影響を打ち消すための科学教育の重要性を説くことに始まり（Jastrow 1886b），「心霊主義の心理学」（Jastrow 1886c）と題された神秘主義批判の論文を執筆しているのである。「心霊主義の心理学」は，人類の進化史，発達史を想定したうえで，オカルトや神秘主義の態度を「先祖返り」的なものとして批判を行っている。ジャストロウは，観察の手段としての写真，測定手段としての諸機械とは別に，心霊主義的体験を，精神疾患と

結びつけながら，同時代の新たなコミュニケーションメディアとのつながりを見てとっている。

> どの精神病院も，この外部世界についてのミクロコスモスである。かつて我らが偏執狂者たちは空気のなかに声を聞いたが，今や彼らは電話を通してそれを聞いている。（Jastrow 1886c: 567）

また，知覚論，錯覚論という主題が扱われる。ジャストロウの知覚論は，視覚中心主義的である。「人間は視覚的動物である」として，人間にとっての知覚の重要性を，視覚，聴覚，運動時の筋肉的触覚的感覚の順で序列化している。

> 実物教育やモデル，図表を用いること，複雑な関係をグラフシステムの曲線に還元すること，そして多くの同じような装置たち，そのすべてが，目が人間の統覚器官としてどれほど堅固なものであるのか，そして目に関わる教育的価値がどれほど一般的に認められているのかを示している。（Jastrow 1888a: 598）

知覚や錯覚は同時代の心理学全体にとって一般的な主題であったが，ジャストロウを特徴づけるのは，このような視覚中心的な知覚論だけでなく，錯覚をめぐる知覚論が，すぐさま神秘主義批判の道具立てとして活用される点である。

> 知覚は，知覚される対象とともに知覚する者の性質によっても決まる。われわれは，未知を既知によって解釈しているのである。つまり，あるタイプの錯覚が生じるのは，この一般法則が当てはまらない場合である。別のタイプの錯覚は，主観的な原因，すなわち相応しくないところへの注意や記憶の欠落，観念 のなかで偏見が優勢になっていることなどによって決まる。奇術や，心霊主義における物理的顕現は，この過程にもっともふさわしい事例を提供している。（Jastrow 1888b: 328）

この錯覚の問題のなかで，コントロールという主題についても，先の実験遂行におけるコントロールとは別に，意識によるコントロールや理性的なコントロールの喪失という使用が現れてくる。神秘主義批判と錯覚論の接合は，それを意図的に引き起こす催眠や暗示の議論に繋がる。催眠や暗示が治療に用いられた当時のヒステリーについてジャストロウは次のようにまとめている。

> その状態の本質について，われわれはほとんど確たる知識をもっていない。ある者は，それを「注意の痙攣 attention-cramp」と呼び，またある者は，より高次な心理に関する脳の中枢の抑制状態として，すなわち脳のもっとも繊細に構成された部分が随意的な，意志によるコントロールと結びつけるすべてが遮断されたものとして記述するのである。（Jastrow 1889b: 78）

ここまでみてきたなかでコントロールという点について整理すれば，心的なものとしては意識や理性，意志，身体的には脳によって，知覚や意識，筋肉など身体へと何らかの影響が及ぼされることというように，コントロールの動因と対象が想定されているのをみてとることができる。

2　ジャストロウにおけるセルフコントロール——1890 年代

1890 年代においても，80 年代に着手された主題が継続していく。心理学という科学自体の紹介と学術的な状況整理（Jastrow 1894a; 1896c）において，さらに応用可能性という主題が新たに議論され（Jastrow 1899a），神秘主義批判（Jastrow 1895; 1898d）が行われる。とりわけ知覚や錯覚をめぐる研究のなかに（Jastrow 1892a; 1896a; 1896b; 1897a; 1898e），ジャストロウの仕事のなかでも著名なものが行われている。1893

年のシカゴ万博の際に人類学館の心理学実験室でヘレン・ケラー Helen Keller［1880-1968］に対して行った観察と実験（Jastrow 1894b）と，ウサギ - アヒルの多義図形を含む様々な錯覚を解説する研究である（Jastrow 1899b）。

新たに登場する主題として，大学教員の地位や同時代の研究状況などをめぐる大学批判がある。大学教員は，生存競争にさらされているにもかかわらず，「適正な収入」，「適正な権威」，「適正な余暇」が存在せず（Jastrow 1898b），「教授とは，給料がひどく割りに合わない仕事の典型である」（Jastrow 1898a）というのである。この大学についての議論は，大学の行政管理をめぐり 1900 年代以降にも継続し，ジャストロウによる文献の少なからぬ割合を占めることになる。

だが，1890 年代に現れる主題で本論の観点からもっとも重要なのは，80 年代から行ってきた反応時間の研究を踏まえ（Jastrow 1890），従来軽視されていた主題として，無意識的なもの，不随意的なものへの関心が中心に出てくることである（Jastrow 1892b; 1892c）。被験者の指の動きを記録するオートマトグラフなる装置を作成し，被験者からは見えない状態にした上で，無意識的ないし不随意的な筋肉の運動を記録する実験を行っている。この時点において，ジャストロウは「心を読むということは，筋肉を読むということ」という方針を述べ，意識と筋肉のコントロールとの関係とを問題にしている。

3　ジャストロウにおけるセルフコントロール ――1900 年代

1900 年代，ヘレン・ケラーの研究を含め（Jastrow 1903a; 1903b），すでに扱ってきた主題について多くの文章を発表していく。大衆向けに書かれた心理学の代表的な文章をまとめ，ジャストロウのもっとも多く読まれた著作となる『心理学の事実と寓話』が出版されている（Jastrow 1900）。

ジャストロウの心理学におけるセルフコントロールという点から，重要な著作は『潜在意識』である（Jastrow 1906）。ジークムント・フロイト Sigmund Freud［1856-1939］の影響を受けながら（Jastrow 1961）[3)]，すでに現れていた無意識的なもの，不随意的なものに対する関心を展開したものである。ジャストロウは，意識の機能を，自身の身体の状態に対する内への意識と，環境の状態に対する外への意識にわけ，それぞれの機能を検討していく。意識は神経系に基づくものであり，人間の発達とコントロール能力の獲得過程は重なっている。子どもが成長するにつれ，身体に対する随意的な，意志によるコントロールが芽生えてくるという。ジャストロウが考える意識と意志，潜在意識と不随意性との関係は次のようなものである。潜在意識的なものは，不随意的なものだが，不随意的なものなら，潜在意識的であるというわけではない。すなわち，不随意的な反応を行っている際に，少なからずそれに気づき意識しているということがあるからである。たとえば，ひざの腱に刺激を与えて足が上がるときのような，反射的な動作は，不随意的な動作だが，それには気づいていることがあるという状況である。

潜在意識の様々なあり方を検討するなかで，心理学実験の正確な遂行に必要なかたちでのコントロールという使用も含む，様々なかたちでのコントロールというものが繰り返し登場してくる。意識の機能が内への意識と外への意識として区別されたのに対応して，身体へのコントロールと環境へのコントロールが登場してくる。さらに，コントロールの動因と対象として，す

3）ただし，ワトソンに対する態度と同様に，フロイトに理論に対してもジャストロウは両義的である。フロイトの理論によって心理学史が決定的な変化を受けたことを認めつつ，オイディプスやリビドーからなる家族や性にかかわる彼の理論全体が成功しているのかどうかについては懐疑的であり，精神分析を広範な心理療法に用いることできる選択肢の一つとして見るべきと考えていた（Jastrow 1961）。

でに登場してきたものに新たな要素が加えられる。夢がそこから逸脱するものとしての真善美に関する抽象的な理念や標準である。理念や標準によって思考や行いがコントロールされる，支配されるという状況が描写されるのである。

> 夢には，論理的に一貫していたり，道徳的に正しかったり，美的に称賛に値したりということに関する義務を含む理念など存在しない。このような標準や理念というものによってコントロールされるのは，認可された思考だけである。絶え間ない努力に対する報酬として，われわれの行いは，真理や美徳，適合性などの諸理念に支配されるようになっている。これら理念はすべて，忍耐強い意志の表現であり，様々な仕方で個人の性格に寄与している。（Jastrow 1906: 220）

「標準や理念」によるコントロールとは，「忍耐強い意志の表出」であり，「性格」の形成に役立っているとされる。そして他の研究者が大麻を使って行った実験の様子を引き，大麻を吸引した学生たちが「セルフコントロール」を働かせねばならなかったと記述している（Jastrow 1906: 255-256）。

4　ジャストロウにおけるセルフコントロール——1910 年代

1910 年代に入っても，ジャストロウは，これまで同様の主題，神秘主義批判（Jastrow 1910a; 1912c），同時代の心理学の状況（Jastrow 1910a; 1912a）について継続的に文章を発表するが，全体の傾向としては，大学批判（Jastrow 1911a; 1911b; 1912d; 1912e）についての議論が目立つようになり，他方で従来行われてきた知覚論や錯覚論は目につかなくなってくる。知覚論や錯覚論が後景に退いたのと対照に前景に現れてくるのは，人間のパーソナリティという主題である。

1910 年に発表した『人間の諸性質』（Jastrow 1910）を発展させるかたちで，1915 年には『性格と気質』（Jastrow 1915a）を刊行する。そして，この『性格と気質』において自己に対するコントロール，あるいはセルフコントロールが明示的に主題として議論されるようになる。『潜在意識』においてもコントロールという語は数多く使用され，セルフコントロールという語も使用される。しかし，それはあくまでも潜在意識的な反応や夢といった議論の主題となる状況を記述する上で使用されるのにとどまり，主題として検討されてきたわけではなかった。それが，『性格と気質』に至り中心的な主題になる。すなわち，「古くから，人間の多様性への関心と，人間の特性の理解とコントロールへの関心が存在した」（Jastrow 1915a: 1）のであり，この書物は，そのような「性格と気質を決定づけるものを理解し，コントロールするという関心」（Jastrow 1915a: 2）に答えようするというのである。

Ⅳ

1　『性格と気質』

ここからは，『性格と気質』において，コントロール，とりわけ自己のコントロールというものがどのような位置を占めるのかを明らかにしていきたい。

『性格と気質』の目的は，性格と気質という人間の特性がいかなる源泉から現れてきたのかを解明することである。この著作自体の執筆は，二つの方向から動機づけられている。第一のものはこの目的について科学的な解明を行おうとする動機であり，第二のものは実践的実用的な目的に役立とうとする動機である。具体的には，1910 年代半ば，第一次世界大戦期においては，すでに 1900 年代後半には諸領域の応用心理学が展開しつつあり，とりわけ産業心理学的な職業相談への実施と関心が拡がっていた。この職業

相談のための教育手法として「性格訓練 character training」が生み出されつつあり，そのための「生の技法 the art of living」としての教育のために，「性格読解 character reading」の重要性が高まっているという（Jastrow 1915a: ix）。

ジャストロウは，このような科学的説明と実践的有用性によって，性格と気質を決定づけるものは何かという探究の歴史における先行する伝統，すなわち，占星術，観相術，骨相学，手相判断といった「運命のコントロール」を行おうとする伝統を乗り越えようとするのである。この点，従来の神秘主義や心霊研究に対する批判の企図に連関し継続するものと見ることができる。

人間の特性をめぐるこの探究においても，ジャストロウは，『潜在意識』において意識の機能を人間の自身の身体への意識と環境への意識に区分したように，個体と環境との関係性に焦点を当て，議論を進めていく。

> 人類の差異は，その共通性と同じように，この主題の解釈の中央に位置している。性や人種，家族関係，個人間の差異である。人間の不平等は，素質の興味深く価値のある表出なのである。しかし，これらの不平等が表面に現れるさいには，それは生物学的ものではなく，社会学的なものとなっている。現代生活の専門分化が人間の備える性質へと押し付けられているのである。これはもともと備わる本質が大規模に再構成されていることの一部であり，文明によって成熟させられているということである。人工環境は，自然環境のように振る舞い，いくつかの選ばれた性質を促進したり抑制したりしているのである。だが，同時にもともと備わる本質に関わるストレスと緊張を投影してもいる。（Jastrow 1915a: x）

ジャストロウは，19 世紀以降の心理学の展開の背後にあった進化論的生物学的観点を踏まえつつ，自然環境だけではなく産業革命以降の近代の人工環境との相互作用を重視する。このような自然的人工的な環境との関係における「可塑性」を見定めようとする対象となるのが，性格と気質である。気質とは「複数の要素からなる生得的な本質の傾向」であり，性格とは，気質を土台として「一貫して元々の傾向性の流れに沿っているが，訓練や環境や目的の支えによって生じてくる」ものである。（Jastrow 1915a: 248）。

2　移転とシステム

ジャストロウのとる進化論的生態学的観点は，同時代にしばしば見られたように，生物の進化と人間の歴史と個体の発達を類比的に重ねて理解していく。ジャストロウは，次のような観点を人間の心的な進歩の原理として採用している。それは，「移転 transfer」の原理，そして「システム」への吸収と系統化という原理である。それぞれどのようなものであるのか。

「移転」の原理とは，人間の備える特性が，進化や発達の過程で，身体的なものから心的なものへ，ありのままのものから比喩的なものへ，個人的なものから社会的なものへと変化していくというものである。たとえば，悲嘆の情動を苦痛の記号によって，身体的な快を歓迎の記号によって直接表現することからより複雑で洗練された表現へと，物理的な罰に道徳的な罰が，物質的な報酬に社会的な昇進や敬意や尊厳がとって変わることである。このようにして，人間の行いを動機づけるところの情動において，単純なものからより複雑化した形態が生まれてくることである（Jastrow 1915a: 47-48）。

このようにして，単純な情動が社会的な要素を含み込み複雑化したものをジャストロウは情操 sentiment と呼び、移転の原理が継続し，身体的心的な特性の秩序が複雑化することを，「シ

ステム」への吸収と系統化と呼ぶ。

> ［システムとは］それぞれに複雑な情操の秩序である。社会組織は，社会組織自体を守るためにその秩序を進化させているのだが，進化させることができるためには，社会組織が個人の性格を捉え，性格のなかに居場所を占めていなければならない（Jastrow 1915a: 51）

個人のもつ情操の秩序を介して，個人的なものと社会的なものは関係している。そして，それぞれの個人のもつ情操が，個人を超えて社会のなかで客観的なかたちをとり，それを介して個人と社会は関係しているという。

> 慣習や実践，約束事，伝統といったものは，このような情操のシステムのより客観的な蓄積物であり記録である。諸制度や尺度は，社会がその防衛のために採用した手段である。諸システムの内部にあるシステム群は，積み重なり，相互作用し，共同して社会的心理的環境を構成している。（Jastrow 1915a: 52）

はじめは，個人の単純な情動だったものが複雑な要素の関係からなる情操というシステムとなり，情操は社会のなかで蓄積し記録されて制度というシステムとなり，それが環境となることで，また個人へと影響をおよぼす。このような相互関係性がジャストロウの議論の骨格をなしている。

ジャストロウによれば，こうした移転とシステムへの吸収ないし系統化の過程において，標準や理念によるコントロールが，人工的な環境である社会の力として働くようになる。

> 性質を評価することは，実際上は，望ましい目標や目的へと性質を方向づけようとする試みとなる。このような目標は，社会組織において具体化し，行いや性格の訓練をコントロールする標準や理念に直接に結びついている。そして今度は，これらが，諸原理や影響のシステムとして成熟し発達することで，実際に社会的な力として作用する。（Jastrow 1915a: 55）

3　社会的心理的環境を形成する情操のシステムにおけるコントロール

ここまでみてきたように，ジャストロウの議論において，1880 年代から登場してきた脳による筋肉のコントロール，意識，理性，意志による知覚や情動，意識のコントロールから，慣習や実践として具体化した情操のシステムにおける標準や理念によるコントロールへと，コントロールを引き起こすものとその対象は多様化し複雑化してきた。だが，『性格と気質』においては，それまで分節化されてこなかったコントロールという概念自体に，一定の明確化がなされるようになる。従来は，心的なコントロールの動因として意識，理性，意志という異なった概念がその都度において用いられてきたが，コントロールはもっぱら意志と結び付けられるようになるのである。

ジャストロウは，人間の行いを動機づける情動的衝動に対して，何かを行うのか行わないのかを決定づける際に，「区別づけとコントロール，知性と意志は，このような役目において相応しいかたちで協働する」という（Jastrow 1915a: 157）。何かを区別することと知性を，コントロールと意志を結び付けるのである。1910 年に刊行した『人間の諸性質』に対して，『性格と気質』は，ここまで述べてきたコントロールなるものの中心性において大きく異なっているが，その差異は，とりわけ第四章の表題「心的コントロールの高次の段階」に見て取ることができる。「心的コントロールの高次の段階」とは，すでに整理した，人間の特性が移転され，システムへと吸収されないし系統化されて一定程度確立した状

態のことである。このような高度化，複雑化を積極的に価値づけるかたちで，ジャストロウは次のようにまとめている。

> すでに見たようにこうして蓄えられているもののなかにこそ，知性化の過程が人格的生活に影響をおよぼす際のそのもっとも豊かな価値――自己のコントロール the control of self――が存している。同じようにして，原因と結果の認識のなかに，そしてこのような知識の諸原理のシステムへの発達のなかに，知性それ自体の領域――自然に対する客観的なコントロールの領域――におけるもっとも高次の達成が存している。（Jastrow 1915a: 242）

ジャストロウは，それまで知覚，情動，意識や筋肉，身体，行いへのコントロールとしてきたものを，自己のコントロールとしてまとめ上げ，自然への，環境へのコントロールと並び立てる。人格的性格と同格で並置するべきものとして，自己のコントロールという概念は位置づけられることになる。

4 『性格と気質』への影響関係

ジョセフ・ジャストロウの『性格と気質』を，自己のコントロールという概念の位置づけの観点から整理してきた。これまでジャストロウの中心的な心理学的主題として語られてきた自己のコントロール，セルフコントロールという概念が，明確に理論的な中心となるのは，彼の心理学者としての活動としてはすでに 30 年ほどを過ぎた 1915 年の『性格と気質』においてだといえるだろう。

だが，以上に整理した『性格と気質』におけるジャストロウの議論の核は，同時代の心理学者たちからの影響から生まれてきたところがある。ジャストロウ自身が，『性格と気質』の前書きにおいて，本書執筆においてもっとも影響を受けた研究として，次の三つを挙げている。最初期の心理学的な社会心理学者とされてきたウィリアム・マクドゥーガルの『社会心理学入門　第二版』（McDougal 1909），「効果の法則」で知られ心理学者エドワード・ソーンダイク Edward Thorndike［1874-1949］の『本来の人間本性』（Thorndike 1913），イギリスの心理学者で作家のアレクサンダー・シャンド Alexander Faulkner Shand［1858-1936］の『性格の基礎づけ』（Shand 1914）である [4]。そのなかでも筆頭に挙げられ，またもっとも早い時期に書かれて，ソーンダイクの『本来の人間本性』とシャンドの『性格の基礎づけ』いずれにおいても盛んに参照されているのが，マクドゥーガルの『社会心理学入門』である [5]。ジャストロウもまたマクドゥーガルの理論に重要なところを負っていると思われる。それがいかなるものであるのかをこれから明らかにしていく。

V

1　マクドゥーガルの『社会心理学入門』

ウィリアム・マクドゥーガルの『社会心理学入門』とはいかなるものであるのか。まず，議論の内容を見る前に，この著作自体の位置づけについて確認しておきたい。ウィリアム・マクドゥーガルは 1871 年に生まれ，イギリスで心理学者になった後，ミュンスターバーグの後任としてハーバード大学に移り，1937 年に没した社会心理学者である。その進化論的観点に関して，ハーバート・スペンサー Herbert Spencer［1820–1903］，チャールズ・ダーウィン Charles

4）すでに量的研究が浸透していたアメリカの心理学界においては，大衆向けの著作で思弁的な面の強い『性格と気質』に対する研究者たちの書評はほとんど批判的であった。（Washburn 1916; Thorndike 1917; Stuart 1917）。

5）マクドゥーガルを，ソーンダイクもまた『本来の人間本性』では批判的に検討しつつ（Thorndike 1913），『性格と気質』の書評のなかではむしろ読むべき対象としてフランシス・ゴルトンともに挙げている（Thorndike 1917）。

Darwin［1809-1882］，トマス・ハクスリー Thomas Huxley［1825-1895］から強い影響を受け，心理学的観点に関してはジェイムズから影響を受けている。1908 年に初版が出版されたマクドゥーガルの『社会心理学入門』は，本能論的社会心理学として，社会学的な社会心理学ではない，最初期の心理学的な社会心理学として位置づけられてきた。そしてマクドゥーガル本人によっても，彼の心理学に対する最大の貢献としてみなされてきた（McDougal 1930: 208）。

しかし，読み直しが進む近年の心理学史においては，この著書を最初の心理学的社会心理学として位置づけることに対して懐疑的な見解がなされている。Boakes（1984=1990: 207=459）によれば，本書のなかでもっとも影響をもったのは，すでに様々なかたちで使用されてきた本能概念を整理し分析し批判した冒頭部分だったという。さらに，Jahoda（2007）は，「1908 年は決定的な年だったか？」と題する章を設け，マクドゥーガルの議論を検討した後，次のように結論づけている。「マクドゥーガルとロスのテキストに関するかぎり，これらは新しい時代の始まりではなく，古い時代の終わりを記しづけているのである。」（Jahoda 2007: 169）

Jahoda（2007）は，マクドゥーガルの進化論的本能論の理解を次のようにまとめている。マクドゥーガルにとってのダーウィニズムの特徴は，第一に「世代を超えて行われた知能的行動は，本能となる」ということ，第二に「本能は，自然淘汰される」ということである。この第一のものに含意されるように，マクドゥーガルの進化論は，ネオラマルキズムに含まれる。なぜなら，マクドゥーガルは，本能を，世代間での遺伝によってのみ変化する「固定的な行動パターン」ではなく，個体の発達の過程において緩和修正され，外部要因によって変化するものとして理解しているからである（Jahoda 2007: 160）。

もちろん，このような現代からの評価のやり直しが行われているにせよ，同時代的な影響として大きな存在であったことは間違いない。1920 年代半ばの Bernard（1924）が「社会心理学の近年の動向」をまとめるさいには，社会的側面を重視する学派に対して，本能など生得的性質を重視する学派の代表としてマクドゥーガルが登場してくる。

2 『社会心理学入門』とセルフコントロール

『社会心理学入門』の議論は，どのようなものであったのか。まず，マクドゥーガルは心理学という学自体を，「行い conduct ないし行動 behavior の実証科学」（McDougal 1909: 15）とした上で，「個人の道徳化ないし社会化を説明する」（McDougal 1909: 18）ことを社会心理学の使命として提起する。

> われわれが解決しないといけない，この本が主に関心をもっている心理学的問題は次のものだ。人間は，義務に従って，あるいは道徳的で合理的に行為することがあるのと同様に，たえず衝動に突き動かされて行為するようになってもいるという事実をいかに説明できるのか，である。（McDougal 1909: 10）

衝動に突き動かされた非合理な行いを説明することが『社会心理学入門』の課題であり，非合理な行いの源泉として構成される概念が「本能」である。マクドゥーガルは，従来のとりわけ哲学者による「本能」ないし「本能的」という語を批判し，他方で専門的な心理学者の間では「本能」概念についてある程度の合意がなされているとして，次のように述べる。

> 大多数によって，これらの術語は，次のようなものを指すためにだけ用いられている。種のすべての成員に共通な，心がもつ一定の特殊な生得的傾向，すなわち，種が環境に適応する過程において

> ゆっくりと進化してきたところの，そして，生得的な要素であり心の構成から削ぎ落とすこともできず生涯を過ごす中で個人が獲得することもできないところの，人種的性格である。（McDougal 1909: 22-23）

こうして限定された本能は，それではどのようなかたちで機能するのか。それは，本能概念の検討の少し前において次のように要約されている。

> 人間の心には，一定の生得的ないし遺伝的な傾向性がある。それは，個人のであれ共同体のであれ，すべての思考と行為の基礎となる源泉ないし動機となる力であり，知的能力の導きの下で諸個人や諸国民の性格や意志が徐々に発達するのに基づく土台である。（McDougal 1909: 19）

そして，マクドゥーガルは，従来，意志に関わるものとして規定されてきた本能概念は，実際には「認知，情緒，意欲の三つの側面」からなるものとして分析されてなければならないと主張する（McDougal 1909: 26）。本能概念を構成するこの三つの側面，とりわけ情緒的側面を強調した点が，マクドゥーガルの本能論において，もっとも注目され議論を呼んだ部分とされる（Jahoda 2007: 160）。

同時代的なマクドゥーガルの議論の影響力という点から離れて，マクドゥーガルの議論に内在的な点からしても，この側面は重要である。なぜならばマクドゥーガルにとって，本能から生じた情動は，行いを動機づける源泉の中心として位置づけられるからである。マクドゥーガルは，シャンドの議論（Shand 1896）を参照することで情動をめぐる議論を展開させ，情動が組織化されたシステムとしての「情操 sentiment」という概念を自身の理論の中心に置く。

> われわれの諸情動，より厳密にいえば，情動的傾向性は，情動を喚起する様々な対象や対象のクラスをめぐるシステムに組織化されている。このような組織化された情動傾向のシステムは，経験にかかわる事実や様態ではなく，われわれの心的活動のすべてに潜在する，複雑に組織化された心の構造にそなわる特徴である。このような，何らかの対象を中心として組織化された情動的傾向のシステムに，シャンド氏は，「情操」という名を与えることを提案している。（McDougal 1909: 112）

そしてマクドゥーガルは，様々に存在する情操というシステムのなかで，とりわけ高次に発達した人間にとってもっとも重要なものとして，「自己」という観念を中心に組織化された情操，「自己をめぐる情操 self-regarding sentiment」を挙げる。

> 社会的行いの低次形態が，直接に本能の刺激から――母性本能の刺激の下で動物の母親が，子どもを守るために，窮乏を，負傷を，あるいは死をも被るときのように――出てくるものである一方で，社会的行いの高次形態は，普通は道徳的とみなされるものだけであるが，本能的衝動の随意的なコントロールと統制を含んでいる。今や，意志作用あるいは意志的なコントロールは，自己という観念から，そして情操という自己の観念を中心に情動と衝動が組織されたシステムから発生するのである。（McDougal 1909: 174-175）

情操という情動的傾向が何らかの対象や観念のまわりに組織化されたシステムは，様々な対象や観念に成立する。そのなかでも道徳という社会的行いの高次の形態には，意志的なコントロールが含まれる。意志的なコントロールは，自己という観念，自己をめぐる情操から生まれるという。マクドゥーガルにおいて，道徳が適切に成立し続けるためには，自己をめぐる情操その

ものが適切なかたちで存在しなければならない。そのために，自己のコントロール，セルフコントロールが要請されてくるのである。

> 採用した原理が自身の行いに強力に働きかけるには，さらに多くのことが必要である。強力なセルフコントロールの情操を持っていなければならないのである。あらゆる抽象的な道徳的情操のなかで，これこそが，意志作用，とりわけ決意のためにもっとも有力な情操である。セルフコントロールは，自己をめぐる情操が特別な仕方で発達したものである。自己をめぐる情操が強固になった人にとっては，セルフコントロールの理念を実現する実現しようという欲望が支配的な動機となり，自分で採用した行為の原理，あるいは意図して決断したことの結果を，他のすべての動機が対立していようとも，適用することが可能になる。（McDougal 1909: 253-254）

そして，個人がいかに道徳を身につけ社会を形成しそのなかで生きていくのかを説明しようとするこの社会心理学の試みにおいて，「セルフコントロールと法への服従の力」とが「社会組織の進歩の本質的条件」（McDougal 1909: 288）であるというのである。『社会心理学入門』の課題を述べる際，「衝動に突き動かされて行為」を「道徳的で合理的」な行為と対比していたことを踏まえれば，マクドゥーガルの本能論的社会心理学において，本能の対となる概念としてセルフコントロールが存在していることになる。

このような本能に対置されたセルフコントロール概念に着目すると，マクドゥーガルの『社会心理学入門』は，社会的な進化や発達のなかで，情操という情動が組織化されたシステムが形成され，そこでセルフコントロールが中心的な位置を占めることになる理論としてみることができる。『社会心理学入門』による概念の関係を踏まえて，ジャストロウの『性格と気質』を見たとき，セルフコントロール論としての両者が非常に近いものであることは明らかだろう。そして，ジャストロウは，『性格と気質』において『社会心理学入門』を参照することで，それ以前の著作では行っていなかったかたちでセルフコントロールをめぐる議論を展開したのである。シャンドからマクドゥーガルへのイギリス心理学，社会心理学が，アメリカのジャストロウに流れこむという展開を見て取ることができるはずである。

Ⅵ　結論

本論は，19 世紀末から 20 世紀の前半にかけての心理学の大衆化において中心的であったセルフコントロールという主題がどのように登場してきたのか，その代表的心理学者であるジョセフ・ジャストロウに焦点を合わせるかたちで検証してきた。本論が示したのは次のことである。ジャストロウの活動を通時的にみたとき，コントロールという概念は 1880 年代から様々なかたちで議論に登場してきたが，それが理論的なかたちをとったのは 1910 年代のことである。より具体的には，1910 年の『人間の諸性質』までには見られなかった情操を中心とした心のシステムとそこでのセルフコントロールの働きを設定する理論が登場する，1915 年の『性格と気質』である。そして『性格と気質』の理論は，ジャストロウの参照したマクドゥーガルが『社会心理学入門』において提示したものから影響を受けたと考えられるということである。

もちろん，ジャストロウが心理学の大衆化状況の中心の一人であったということから，そのまま，セルフコントロール概念の普及の中心であったということにはならず，同時代のその他の心理学者たちの言説との関係から，その重要性は改めて検証されなければならないかもしれない。そのような同時代的な主題の展開を検証

することは，今後に残された課題である。

また，セルフコントロール概念が明確に登場して以降のジャストロウの活動はどのようなものであったのか，セルフコントロールをめぐる議論を踏まえ改めて検証することも今後なされる必要があるだろう。1920 年代以降，ジャストロウは，新聞や雑誌，ラジオといったマスメディアにおいてカウンセリングや心理学的な人生相談といった活動を行っていき，その活動はたとえば『ニューヨーク・タイムズ』といった有力メディアによって継続的に大衆に伝達され続けた。このようなマスメディアにおけるジャストロウの活動は，その後，20 世紀後半を通じて 21 世紀にまでいたるメディア上での心の専門家という存在のあり方を歴史化する上でも重要になると思われる。

引用文献

Allport, G. W.（1937）*Personality: A Psychological Interpretation*. New York: Henry Holt & Company. 詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正（訳）(1982) パーソナリティ――心理学的解釈. 新曜社.

Baker, B. D. and L. T. Benjamin Jr.（2014）*From Seance to Science: A History of the Profession of Psychology in America second edition*. Akron: The University of Akron Press.

Behrens, P. J.（2009）War, sanity, and the Nazi mind: the last passion of Joseph Jastrow. *History of Psychology*, 12（4）, 266–284.

Behrens, P. J.（2009）Psychology takes to the airways: American radio psychology between the wars, 1926–1939. *American Sociologist*, 40, 214–227.

Blumenthal, A. L.（1991）The intrepid Joseph Jastrow. In Kimple, G. A., M. Wertheimer. and C. L. White（eds.）*Portraits of Pioneers in Psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.

Blumenthal, A. L.（1994）Joseph Jastrow: Pioneer psychologist facing the "Administrative Peril". *Annals of the New York Academy of Sciences*, 727, 79–89.

Boring, E. G.（1957）*A History of Experimental Psychology*, second edition. New York: Appleton-Century-Croft, Inc. 540–542.

Burnham, J. C.（1987）*How Superstition Won and Science Lost: Popularizing Science and Health in the United States*. New Brunswick: Rutgers University Press.

Duckworth, A.（2011）The significance of self-control. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 108（7）, 2639–2640.

Gold, N.（2013）Team reasoning, framing, and self-control: An Aristotelian Account. Levy, N（ed.）*Addiction and Self-Control: Perspectives from Philosophy, Psychology, and Neuroscience*. Oxford: Oxford University Press. 48–66.

Jansz, J. and P. v. Drunen.（eds.）（2004）*A Social History of Psychology*. Malden: Blackwell Publishing.

Jastrow, J.（1883）The mechanism of direction. *Science*, 2（41）, 655–656.

Jastrow, J.（1885a）Some peculiarities in the age statistics of the United States. *Science*, 5（122）, 461–464.

Jastrow, J.（1885b）Composite portraiture. *Science*, 6（134）, 165-167.

Jastrow, J.（1886a）Experimental psychology in Leipzig. *Science*, 8（198）, 459–462.

Jastrow, J.（1886b）Elementary science-teaching. *Science*, 7（157）, 114–115.

Jastrow, J.（1886c）The psychology of spiritualism. *Science*, 8（202）, 567–568.

Jastrow, J.（1887）Psycho-physical research in America. *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 16, 422–423.

Jastrow, J.（1888a）Eye-mindedness and ear-mindedness. *Popular Science Monthly*, 33, 597–608.

Jastrow, J.（1888b）The psychology of deception. *Popular Science Monthly*, 34, 145–157, 328.

Jastrow, J.（1889a）Aspects of modern psychology. *Open Court*, 3（36）, 1907–1910.

Jastrow, J.（1889b）The problems of “psychic research.” *Harper's New Monthly Magazine*, 79, 76-82.

Jastrow, J.（1890）The time-relations of mental phenomena. *Science*, 16（398）, 155–157.

Jastrow, J.（1892a）On the judgment of angles and positions of lines. *American Journal of Psychology*, 5（2）, 214–248.

Jastrow, J.（1892b）Involuntary movements. *Popular Science Monthly*, 40, 743–750.

Jastrow, J.（1892c）Further study of involuntary movements. *Popular Science Monthly*, 41, 636-642.

Jastrow, J.（1894a）Modern psychology and daily life. *Dial*, 16（182）, 46–47.

Jastrow, J.（1894b）Psychological notes on Helen Kellar. *Psychological Review*, 1（4）, 356–362.

Jastrow, J.（1895）The logic of mental telegraphy. *Scribners*, 18（5）, 571–576.

Jastrow, J.（1896a）Community of ideas of men and women. *Psychological Review*, 3, 68–71.

Jastrow, J.（1896b）An apparatus for the study of sound intensities. *Science*, 3（67）, 544–546.

Jastrow, J.（1896c）Some phases of the science of mind. *Dial*, 20（231）, 73–76.

Jastrow, J.（1897a）The popular aesthetics of color. *Popular Science Monthly*, 50, 361–368.

Jastrow, J.（1897b）More psychic research. *Dial*, 22（258）, 181–182.

Jastrow, J.（1898a）The life of a college professor. *Aegis, University of Wisconsin*, 3–8.

Jastrow, J.（1898b）The status of American professor. *Educational Review*, 16, 417–434.

Jastrow, J.（1898c）A sorting apparatus for the study of reaction-times. *Psychological Review*, 5（3）, 279–285.

Jastrow, J.（1898d）Modern phases of mind-lore. *Dial*, 24（281）, 145–149.

Jastrow, J.（1898e）Some aids to the study of stereoscopic vision. *Science*, 7（175）, 615–622.

Jastrow, J.（1899a）Practical aspects of psychology. *Educational Review*, 17（2）, 135–153.

Jastrow, J.（1899b）The mind's eye. *Popular Science Monthly*, 54, 299–312.

Jastrow, J.（1900）*Fact and Fable in Psychology*. Boston: Houghton, Mifflin and Company.

Jastrow, J.（1903a）Hellen Kellar: A psychological autobiography. *Popular Science Monthly*, 63, 71–83.

Jastrow, J.（1903b）The story of Hellen Kellar. *Dial*, 34（404）, 271–273.

Jastrow, J.（1906）*The Subconscious*. Boston: Houghton, Mifflin and Company.

Jastrow, J.（1910a）Malicious animal magnetism. *Hampton's Magazine*, Oct. 10, 25, 447–464.

Jastrow, J.（1910b）*The Qualities of Men: An Essay in Appreciation*. Boston: Houghton Mifflin company.

Jastrow, J.（1911a）The story of the college curriculum. *Dial*, 51（607）, 250–251.

Jastrow, J.（1911b）Problems of modern education. *Dial*, 50（597）, 341–344.

Jastrow, J.（1912a）The legacy of William James. *Dial*, 52（613）, 12–14.

Jastrow, J.（1912b）The domain of psychology. *Dial*, 52（618）, 226–228.

Jastrow, J.（1912c）A rational view of the supernatural. *Dial*, 52（624）, 461–463.

Jastrow, J.（1912d）"Externalism" in our colleges. *Dial*, 53（636）, 482–483.

Jastrow, J.（1912e）The administrative peril in education. *Popular Science Monthly*, 81, 495–506.

Jastrow, J.（1915a）*Character and Temperament*. New York: D. Appleton & Co.

Jastrow, J.（1915b）The antecedents of the study of character and temperament. *Popular Science Monthly*, 86, 590–613.

Jastrow, J.（1923）Conan Doyle's witness. *New York Times*, September 9, 1923.

Jastrow, J.（1929）Mind and emotion control. Herrick, C. J., G. Humphery, J. Jastrow, F. H. Allport & E. A. Burtt. *Mind and Behavior*. New York: D. Van Nostrand Company, Inc.

Jastrow, J.（1961）Joseph Jastrow. Murchison, C.（ed.）*A History of Psychology in Autobiography Volume I*. New York: Russell & Russell, 135–162.

Levy, N.（ed.）（2013）*Addiction and Self-Control: Perspectives from Philosophy, Psychology, and Neuroscience*. Oxford: Oxford University Press.

McDougal, W.（1908）*An Introduction to Social Psychology*. London: Methuen & Co.

Mischel, W.（1968）*Personality and Assessment*. New York: John Wiley & Sons, Inc. 詫摩武俊監（訳）（1992）パーソナリティの理論――状況主義的アプローチ．誠信書房．

Mischel, W.（1971）*Introduction to Personality*. New

York: Holt, Rinehart & Winston, Inc.

Mischel, W.(2014) *The Marshmallow Test: Understanding Self-Control and How to Master it*. London: Bantam Press.

Moffitta, T. E., Arseneaultb, L., Belskya, D., Dicksonc, N., Hancox, R. J., Harrington, H., Houts, R, Poulton, R., Roberts, B. W., Ross, S., Sears, M. R., Thomson, W. M., and Caspi, A. (2011) A gradient of childhood self- control predicts health, wealth, and public safety. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 108, 2693–2698.

Morawski, J. G. and G. A. Hornstein. (1991) Quandary of the Quacks: The Struggle for Expert Knowledge in American Psychology, 1890-1940. Brown, J. and D. K. v. Keuren. (eds.) *The Estate of Social Knowledge*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 106–133.

Münsterberg, H. (1909) *Psychotherapy*. New York: Moffat, Yard and Company.

New York Times. (1926) Doyle Scores Dr.Jastrow. *New York Times*, December 28, 1926

Pettit, M. (2007) Joseph Jastrow, the psychology of deception, and the racial economy of observation. *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 43 (2), 159–175.

Roback, A. A. (1927=1973) *The Psychology of Character: With a Survey for Temperament*. New York: Arno Press.

Roback, A. A. (1952) *History of American Psychology*. New York: Library Publishers.

Shand, A. F. (1896) *Character and the Emotions*. *Mind*, 5 (18), 203–226.

Shand, A. F. (1914) *The Foundations of Character: Being a Study of the Tendencies of the Emotions and Sentiments*. London: Macmillan.

Skinner, B. F. (1953=1965) *Science and Human Behavior*. New York: Free Press. 河合伊六・長谷川芳典・高山巌・藤田継道・園田順一・平川忠敏・杉若弘子・藤本光孝・望月昭・大河内浩人・関口由香（訳）(2008) 科学と人間行動. 二瓶社.

Stuart, H. W. (1917) Character and Temperament. by Joseph Jastrow: Review. *American Journal of Sociology*, 23 (1), 130–132.

Thorndike, E. L. (1913) *The Original Nature of Man*. New York: Teachers College, Columbia University.

Thorndike, E. L. (1917) Character and Temperament by Joseph Jastrow: Review. *Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, 14 (1), 24–25.

Washburn, M. F. (1916) Character and Temperament by Joseph Jastrow: Review. *Philosophical Review*, 25 (5), 745–746.

Ward, S. C. (2002) *Modernizing the Mind: Psychological Knowledge and the Remaking of Society*. Westport: Praeger.

Watson, J. B. (1913) Psychology as the behaviorist views it. *Psychological Review*, 20, 158–177.

Watson, J. B. and McDougall, W. (1928) *The Battle of Behaviorism: An Exposition and an Exposure*. London: K. Paul, Trench, Trubner.

Wittgenstein, L. (2003) *Philosophische Untersuchungen*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.

（受稿日：2014. 12. 1）
（受理日：2015. 5. 8）

Original Article

Self-Control in Joseph Jastrow's Popularization of Psychology

SHINOGI Ryo

（Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University）

The idea of self-control is often used in some disciplines, as well as in everyday life. But the history of self-control in psychology has not been written about enough yet. The purpose of this paper is to show how the concept of self-control had appeared in the discourses of Joseph Jastrow. Joseph Jastrow was known as a psychologist who wrote many articles for the public in popular magazines and newspapers during the late 19th and early 20th centuries. He strongly criticized spiritualism and pseudoscience on the one hand and offered advice to the public through the popular media about their mental life, especially, how to control themselves. In this paper, his discourses from the 1880s through the 1910s are examined in order to show how he used the notion of self-control. His uses of the concept of self-control were found in his articles during the late 19th century, but the theme of self-control was especially prominent in his book *Character and Temperament* in 1915. *Character and Temperament* was written with the influence of William McDougall, who was a famous social psychologist during this period. McDougall's *Introduction to the Social Psychology* was known as the instinct theory in social psychology. He felt the notion of self-control as an ideal of social evolution from the instinctive life of primitive people. In conclusion, the uses of the idea of self-control by Joseph Jastrow in popular psychology in 1915 were connected with the instict theory in the early psychological social psychology by William McDougall.

Key Words : Joseph Jastrow, self-control, William McDougall, Popularization of Psychology
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.32, 35–53, 2015.